

鳥山四男所長について

中谷宇吉郎の随筆「ヂストマ退治の話」(1949)の中につぎの部分があります。

「あとで聞いた話であるが、その頃、今の日立の中央研究所長をしている鳥山君が、まだ北大工学部の教授であって、電気学会の会員たちをつれ、低温室へ人工雪の見学に来たことがあったそうである。その時、私が説明をするのにステッキでやっと身体を支えていたということである。鳥山君が驚いて、当時私と同僚であった茅君に、…」

その頃とは、宇吉郎が伊豆の伊東へ転地療養する直前の1936(昭和11)年の夏頃のことです。鳥山君とは？他の随筆には登場していないので分かりません。しかし、日立の〔中研〕は拙稿「湯本清比古のその後は…」にも関係することです。

筆者は勤務先にある図書室で『中央研究所史』(1972年発行、以下『所史』と略す)を見て、疑問が氷解しました。

・ ・ ・ ・ ・

〔中研〕が発足したのは1942(昭和17)年4月、初代所長は馬場条夫という大物(専務取締役)でした。北大教授の鳥山四男が日立の〔中研〕の主任研究員(部長待遇)として赴任したのは戦争中の1944年8月20日(終戦の1年前)のことです。当時の〔中研〕は時期が最悪で基礎研究をやる状況になく、実用研究への転換を余儀なくされました。この時期に鳥山は何故転職したのでしょうか？…その事情は分かりません。

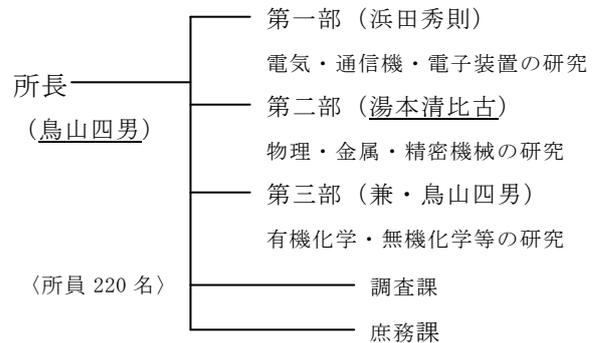
この頃はすでに食糧事情が悪化していました。馬場所長の指示で所内の空き地を畑にし、ジャガイモやカボチャを栽培して所員の窮乏を救いました。勤務時間内も1時間に限って耕作を認めていたそうです。鳥山は電気燻製の研究をして、何と所内で捕まえた蛇を燻製にして食べたそうです。

戦後、馬場所長は役員であったため戦争協力者と見做され、GHQ(占領軍最高司令部)による公職追放で退任し、1947年2月、後任に鳥山四男が第2代所長に指名されました。戦争遂行に関係

が薄い者が選ばれたのだと思われれます。これは鳥山にとって予想外のことだったに違いありません。右は『所史』の巻頭に歴代所長として掲載されている鳥山の写真です。



所長就任時、鳥山四男は51歳と思います。あの湯本清比古より2歳年長の筈です。この二人を示す〔中研〕の組織図が『所史』の中に見つかりました。下記です。(1948年6月、主任研究員制から部課長制に変更。部の中の課名と課長名は省略。)



この組織は鳥山が東北大学へ転出した1951年10月31日まで続きました。この間は鳥山、浜田および湯本の3人が研究所幹部だったわけです。

(なお、浜田ら生え抜きは「馬場さん」と言いながら、「鳥山先生」、「湯本先生」と呼んでいました。)

宇吉郎と知己の2人がここにいたのです。筆者の推測ですが、宇吉郎が旧知の湯本を鳥山に紹介し、鳥山が亀有工場にいた湯本を〔中研〕に招いたのかも知れません(時期的には合います)。

鳥山所長の時代は戦後の混乱期で大争議も起こったため、所史上、最も困難な時でした。所長としての決意が『所史』に記されていました。

「わが国の様な狭い土地に、8000万人もの人々が住むにはどうしても工業立国より他に道はない。それには、研究を基礎として自立できるような工業でなくてはならない。…民間の研究所は工場をバックに持っているのだから、これが盛んにならねば、一国の工業は隆盛にならない。…」

この頃から、日本の工業が発展期(高度成長)に入って行きました。

* * * * *

鳥山四男は7年2ヶ月間日立に勤務し、中央研究所長を4年8ヶ月間務めました。湯本清比古と間違えられようですが、高電圧工学の専門家でした。放電の研究が有名だそうですから、寅彦先生と宇吉郎や清比古がやった研究にも通じます。同じ感性の持ち主だったと思われる。後年、学士院会員となりました。(1895年生まれで1981年に没しました。)

初稿 2004. 7. 3 (改訂 2011. 11. 16)